

# 第1章 研究の概要

## 1 研究主題

# 「主体的に学び合い、豊かに表現する児童の育成」

～適切な言語活動を通じた授業改善を目指して～

## 2 研究の背景

本校の研究の背景には、「(1)学習指導要領改訂の動き」と「(2)子どもの現状」がある。

### (1) 学習指導要領改訂の動き

平成 28 年 12 月に中央教育審議会において、「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)」が示された。(以下「中央教育審議会答申」という。)

中央教育審議会答申では、学習指導要領等が、「学びの地図」としての役割を果たすことができるよう以下の6点にわたってその枠組みを改善するとともに、各学校において教育課程を軸に学校教育の改善・充実の好循環を生み出す「カリキュラム・マネジメント」の実現を目指すことなどが求められた。

- ①「何ができるようになるか」(育成を目指す資質・能力)
- ②「何を学ぶか」(教科等を学ぶ意義と、教科等間・学校段階間のつながりを踏まえた教育課程の編成)
- ③「どのように学ぶか」(各教科等の指導計画の作成と実施、学習・指導の改善・充実)
- ④「子ども一人一人の発達をどのように支援するか」(子どもの発達を踏まえた指導)
- ⑤「何が身に付いたか」(学習評価の充実)
- ⑥「実施するために何が必要か」(学習指導要領等の理念を実現するために必要な方策)

これらを踏まえ、平成 29 年3月31日に学校教育法施行規則を改正するとともに、小学校学習指導要領が公示され、令和 2 年4月1日から全面実施に至った。

### (2) 子どもの現状

中央教育審議会答申においては、小・中学校の国語科の成果と課題について、次のように示している。

- PISA2012(平成 24 年実施)に比べ、PISA2015(平成 27 年実施)においては、読解力について、国際的には、引き続き平均得点が高い上位グループに位置しているものの、平均得点が有意に低下していると分析がなされている。(中略)情報化の進展に伴い、特に子どもにとって言葉を取り巻く環境が変化する中で、読解力に関して改善すべき課題が明らかになったものと考えられる。
- 全国学力・学習状況調査等の結果によると、小学校では、文における主語を捉えることや文の構成を理解したり表現の工夫を捉えたりすること、目的に応じて文章を要約したり複数の情報を関連付けて理解を深めたりすることが明らかになっている。

これらを踏まえ、改訂後の小学校学習指導要領の国語科の主な内容も次のようなものに示された。

(以下、「小学校学習指導要領(平成 29 年告示) 国語編」引用)

## 目標及び内容の構成

- ① 目標の構成の改善
- ② 内容の構成の改善

(1) 学習内容の改善・充実〔知識及び技能〕と〔思考力、判断力、表現力等〕の各指導事項について、育成を目指す資質・能力が明確になるよう内容を改善した。

- ① 語彙指導の改善・充実
- ② 情報の扱い方に関する指導の改善・充実
- ③ 学習過程の明確化、「考えの形成」の重視
- ④ 我が国の言語文化に関する指導の改善・充実
- ⑤ 漢字指導の改善・充実

(2) 学習の系統性の重視

国語科の指導内容は、系統的・段階的に上の学年につながっていくとともに、螺旋的・反復的に繰り返しながら学習し、資質・能力の定着を図ることを基本としている。

(3) 授業改善のための言語活動の創意工夫

〔思考力、判断力、表現力等〕の各領域において、どのような資質・能力を育成するかを(1)の指導事項に示し、どのような言語活動を通して資質・能力を育成するかを(2)の言語活動例に示すという関係を明確にするとともに、各学校の創意工夫により授業改善が行われるようにする観点から、従前に示していた言語活動例を言語活動の種類ごとにまとめた形で示した。

(4) 読書指導の改善・充実

中央教育審議会答申において、「読書は、国語科で育成を目指す資質・能力をより高める重要な活動の一つである。」とされたことを踏まえ、各学年において、国語科の学習が読書活動に結び付くよう〔知識及び技能〕に「読書」に関する指導事項を位置付けるとともに、「読むこと」の領域では、学校図書館などを利用して様々な本などから情報を得て活用する言語活動例を示した。

### <参考文献>

- ・「小学校学習指導要領(平成29年告示)解説」文部科学省

## 3 研究の主題の設定理由と研究のねらい

(1) 研究主題の設定

平成29年3月、新学習指導要領の改訂では、育成を目指す資質・能力の明確化を図るために、全ての教科等の目標について「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」の三つの柱で再整理され、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を推進することが求められている。

学校教育は平成の時代から、児童が自ら学ぶ授業へと重点が変わり、教師は児童が関心・意欲をもち自ら課題を見つけて主体的に解決していく過程や態度を評価し、適切な支援をするための努力をしてきた。



さらに、今回の改訂では、国語科における授業改善を進めるに当たっては、児童が言語活動の中で「言葉による見方・考え方」を働かせ、言葉の特徴や使い方などの「知識及び技能」、自分の思いや考えを深めるための「思考力、判断力、表現力」等を身に付けていくことができるよう、学習指導の創意工夫を図ることが期待されている。

特に、国語科は、言語能力を育成する中心的な役割を担う教科であることから、教科横断的な資質・能力としての言語能力や情報活用能力等に関わり、今後、言葉を直接の学習対象とする国語教育の果たすべき役割が更に大きくなっていくと考えられる。

以上、改訂の趣旨を踏まえて国語科における本校の児童の課題をみると、「自分が感じたことや物事の特徴を言葉で表現したりすることが苦手であること。」「文章そのものを読み味わおうとする姿勢が少ないこと。」「読書好きであり、読み聞かせの反応はよいが、全体での聞き方、友達の話の聞き方には課題があること。」などの課題が挙げられる。

そこで、本校では、令和元年度から校内研究において、国語科における言語活動を中心に研究することとした。児童が国語に対する関心を高め、意欲的に学習する方法を身に付けられるように、授業改善を行っていくことが必要であると考えた。授業改善を行っていく上で単元づくりにおいては地域の実情や児童の実態を捉えて設定し、系統性を明確にして、カリキュラム・マネジメントを推進していく。そして授業においては、児童が主体的に取り組み、対話的な学びをしていけば、生きて働く言葉の力を身に付けることができると考えた。

本研究では以上の主題に迫るための具体的方策として、令和3年度から授業研究を国語科「C読むこと」に焦点をあて、説明的文章における研究を進めてきた。

麻布小学校では、「主体的に学び合い、豊かに表現する」児童を以下のような目指す児童像を設定した。

	低学年	中学年	高学年
目指す児童像	言葉に着目し、自分の思いや考えをもち、伝え合おうとする児童	言葉に着目し、自分の思いや考えをまとめ、伝え合う児童	言葉を吟味し、進んで伝え合い、思いや考えをまとめたり広げたりする児童

## (2) 研究のねらい

麻布小学校では、以下の研究のねらいから、授業づくりを進めた。

- ① 「何を学ぶのか」「なぜ学ぶのか」「どのように学ぶか」が明確な指導  
→国語科年間指導計画の作成、国語科系統指導表の作成、カリキュラム・マネジメント
- ② 児童が国語科における「見方・考え方」をはたらかせる授業づくり  
→学習指導要領を踏まえた学習指導、教材研究会の実施
- ③ 見通しや振り返りを基に、児童自身が自己の学びを実感できる  
→毎時間の振り返りの実施、既習事項等の教室掲示
- ④ 日常活動において「表現すること」を日常化する。  
→日常活動の実施、ICTを活用した家庭学習
- ⑤ ICT活用による「表現」の広がりを検討する。  
→デジタル教科書の活用、「スクールタクト」(情報共有)、「Feel note」(SNS型表現活動)

#### 4 研究の歩み

##### (1) 令和元年度

###### ① 実態把握

本校の児童の実態は、以下のような課題が挙げられた。

低学年	<ul style="list-style-type: none"> <li>・話すことはよくできているが、聞いて理解することが苦手である。</li> <li>・聞く姿勢がよくない。</li> </ul>
中学年	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分の思いを伝えることが苦手な児童が多い。</li> <li>・表現する力や意欲をもって書くことに課題がある。</li> </ul>
高学年	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分の思いを整理しながら書くことや自分の思いを伝えることに課題がある。</li> <li>・自分の意見は出せるが、その理由を説明できない。</li> </ul>

以上を踏まえ、自分の考えをもつことや相手に適切に表現することが苦手な児童が多いという課題があることを共有した。

###### ② 本年度の目指す児童像と手立て

課題を踏まえ、目指す児童像や課題に対する手立てについて下記のように考えた。

	低学年	中学年	高学年
目指す児童像	◎自分の思いや考えをもち、伝え合おうとする児童	◎表現を工夫し、自分の思いや考えを伝え合う児童	◎言葉を主体的に読み進め、自分の言葉で思いや考えを表現し合う児童
児童の具体的な課題	<ul style="list-style-type: none"> <li>○一方的に話すか、聞こうとする態度が身に付いていない。</li> <li>○自分の思いや考えを表現することが難しい子がいる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○大切な点を捉えながら、「話すこと・聞くこと」「書くこと」、表現することについて、発信・受け取りともに課題がある。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○文章のおもしろさに気付く前に学習に関わろうとしなくなる児童がいる。</li> <li>○自分の考えをまとめることが苦手な児童がいる。</li> </ul>
具体的な手立て	<ul style="list-style-type: none"> <li>○話型を提示する。 →話す・聞くスタンダード ハンドサイン</li> <li>○自分や他者の思いを整理するメモを作成する。 →全教科で取り入れていく</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○表現の工夫を知る。</li> <li>○3、4年が聞いて分かる言葉で具体的に示す。 →話す、速さ、強弱、構成、要約等</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○児童が必要感、必然性をもてる学習活動を設定する。</li> <li>○ゴール設定を明確にし、児童に見通しをもたせる。</li> <li>○児童が自分の変化を見取ることができるノート指導を行う。 →継続的な振り返り等</li> </ul>

###### ③ 研究の重点

麻布小学校では、研究主題を「主体的に学び合い、豊かに表現する児童の育成」とし、前年度までで研究していた「総合的な学習の時間」の成果であるカリキュラム・マネジメントを通じた授業づくりを生かしていくために、副題を「～言語活動の充実を図るカリキュラム・マネジメントと授業づくり～」と設定し、教科を国語科に絞り研究を始めた。

講師には、財団法人言語教育振興財団の理事、元港区立青南小学校校長の奥水かおり先生をお招きし、研究を積み重ねた。

研究の柱は、以下の通りである。

#### ア カリキュラム・マネジメントの可視化

他教科や行事と関連させ、年間を見通した国語科年間指導計画を作成し、児童が目的意識をもてるような単元づくりを心がけた。また、児童が単元の中で身に付けた力を発揮する機会を設けるよう計画することで、児童に達成感を味わわせることを目指した。

#### イ PDCA サイクルの充実

「見通し」と「振り返り」を重点的に実施した。単元目標に対して、児童が単元における到達度を教師が把握することを目的とした。また、児童自身も、自分の学びを実感することを目指した。

#### ウ 系統的な指導の充実

学年ごとの指導事項を明確にするため、国語科系統指導表を作成した。指導事項が明確化されたことで、教師と児童が「何を学ぶのか」ということを共有しながら授業を進めていくことを目指した。

#### エ シンキングツールの活用

前年度、総合的な学習の時間で活用していたシンキングツールを活用することで、児童に考えや意見をもたせることを目指した。

#### オ 「4つの対話」による活動の充実

「自分と作品」「自分と友達」「自分と教師」「自分自身」の「4つの対話」を単元の中で充実させることで、児童が学習材に対して関わる機会を増やし、多面的・多角的に学習材を吟味することを目指した。

### ④ 実践

学年	各学年の取り組み
全校	<ul style="list-style-type: none"><li>・国語科年間指導計画の作成</li><li>・国語科系統指導表作成</li><li>・学校図書館、地域図書館の活用</li><li>・座席表の活用(情報集約、見取り等)</li><li>・ハンドサインと導入「いけん」「さんせい」「はんたい」「つけたし」</li><li>・毎時間の児童の振り返り</li></ul>
1年	<ul style="list-style-type: none"><li>・幼稚園交流で生かすための言語活動の設定(どうぶつクイズ)</li><li>・生活科の校外学習(上野動物園)を授業の導入に活用</li><li>・音読指導の充実(年間の家庭学習課題)</li><li>・ワークシートの充実(分科会、研究推進委員会で検討)</li></ul>

2年	<ul style="list-style-type: none"> <li>・保護者に発表することを目的とした言語活動を設定(音読発表会)</li> <li>・音読指導の充実(年間の家庭の学習の課題)</li> <li>・音読発表会に向けたオリジナル台本の作成(授業で学んだことを書き込んでいく)</li> <li>・全文シートの活用(教材文の全文が掲載されているワークシート)</li> </ul>
3年	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「港区語り部の会」の方に向けた言語活動を設定(感想文の作成)</li> <li>・年間を通した考えや思いを書く活動の実施(全校遠足、音楽会、展覧会等)</li> <li>・語彙の獲得の充実(言葉の宝箱の活用、ペアトーク)</li> <li>・自分の考えの根拠となる文章を示す活動の充実(サイドライン、書き抜き等)</li> </ul>
4年	<ul style="list-style-type: none"> <li>・3年生に向けた言語活動の設定(平和に関する本の紹介カードの作成)</li> <li>・全文シートの活用(教材文の全文が掲載されているワークシート)</li> <li>・語彙の獲得への取り組み(辞書、言葉の宝箱の活用等)</li> <li>・授業に即した話し合いの場の設定(ペア、トリオ、グループ)</li> </ul>
5年	<ul style="list-style-type: none"> <li>・キャリア教育に繋がる言語活動の設定(ポップ作成)</li> <li>・語彙の獲得、活用の実践(キャッチコピーの言葉の精選、吟味)</li> <li>・到達度段階に応じた支援の明記</li> <li>・対話活動の目的を明確にした授業の実施</li> </ul>
6年	<ul style="list-style-type: none"> <li>・卒業制作に向けた言語活動の設定(感じたことや感覚を言語化する活動)</li> <li>・自分の言葉を吟味し、相応しい語句で表現する活動の充実(移動教室で訪れた美術館、全校遠足、音楽会、展覧会等)</li> <li>・筆者を知るための校外学習の実施(『高畑勲展』の見学)</li> <li>・4つの対話活動の実践(「作品との対話」「他者との対話」「教師との対話」「自分自身との対話」)</li> </ul>

### ⑤ 授業実践

学年(実施月)	単元名	教材名
5年(5月)	「伝記を読んで、先人の生き方や考え方を紹介し合おう」	「千年の釘にいどむ」
4年(6月)	「『一つの花』をしようかいしよう」	「一つの花」
6年(9月)	「効果的な表現について、自分の考えをまとめよう」	「『鳥獣戯画』を読む」
2年(10月)	「音読劇を発表しよう」	「お手紙」
3年(11月)	「心をうたれた場面を中心に感想をまとめよう」	「ちいちゃんのかげおくり」
1年(12月)	「ちがいを考えて読もう」	「どうぶつの赤ちゃん」

### ⑥ 成果と課題

#### <成果>

- 児童が目的意識をもてるめあてや単元の課題設定を工夫することができた。
- 系統性を意識した指導事項を明確にすることができた。
- 毎時間の振り返りが定着し、児童が学びを実感することに繋がった。また、評価を適切に行う判断基準の一つとすることができた。

#### <課題>

- 話し合い活動の目的を明確にする必要がある。
- 語彙力向上のための環境作りや日常活動などを工夫する必要がある。
- 自分の考えを表現する活動の充実を図る必要がある。

## (2) 令和2年度

### ① 副題の変更

新学習指導要領の全面実施であること、令和元年末の成果と課題を踏まえ、言語活動の充実が目的にならないよう、副題を「～適切な言語活動通した授業改善を目指して～」とした。

### ② コロナ禍における授業づくり

新型コロナウイルスの感染拡大に伴う対策として、臨時休業から始まった。令和2年度は、コロナ禍における授業づくりが主な研究の柱となった。コロナ禍の対応に追われる中、研究は続くこととなった。

以下の取り組みに重点をおいて研究を進めた。

### ③ 研究の重点

#### ア 毎時間の目標提示と振り返りの徹底

児童が見通しをもって授業に取り組めるよう教師が毎時間めあてを提示した。また、児童が学びを実感するために、めあてに対する振り返りを毎時間行った。

#### イ 読書環境の整備

図書館司書や図書館支援の先生と連携をし、学習に即した本を学級に置いたり、地域図書館の職員の方に「おすすめの本」を紹介してもらったりした。また、PTAの方に読み聞かせをするなど児童があらゆる本に触れる機会や本を知る機会を整えた。

#### ウ 分科会ごとの授業づくり

それまでは、研究授業者のみが指導案を作成することが多かったが、分科会の指導案検討、研究推進委員会と分科会合同指導案検討に分け、より多くの教員が検討段階からかかわることで、授業実践やその後の協議会の意見が明確な成果が課題につながることを目指した。

#### エ 日常活動の実践

各分科会が時間や活動を設定し、日常活動を進めていくことを目指したが、コロナ禍において実施できることを実施するに留まった。

#### オ ICTの活用

高学年を中心に、ICTを活用し意見の全体共有や自分の意見を表現する際に活用した。「スクールタクト」やMicrosoftの「power point」「word」等を活用した。

### ③ 実践

学年	各学年の取り組み
全校	・国語科年間指導計画の見直し ・国語科系統指導表の見直し ・学校図書館、地域図書館の活用 ・日常活動の実施 ・毎時間のめあて提示と児童の振り返り
1年	・動物のかくれ方紹介(クイズ、動作化、ペープサート) ・音読発表(紙芝居) ・動物の赤ちゃん紹介カード作成 ・音読指導の充実(年間の家庭学習の課題) ・ワークシートの充実(分科会、研究推進委員会で検討)



2年	<ul style="list-style-type: none"> <li>・保護者に向けた言語活動を設定(音読発表会)</li> <li>・音読指導の充実(年間の家庭学習課題)</li> <li>・全文シートの活用(教材文の全文が掲載されているワークシート)</li> </ul>
3年	<ul style="list-style-type: none"> <li>・年間を通した考えや思いを書く活動の実施</li> <li>・語彙の獲得の充実(言葉の宝箱の活用、ペアトーク、辞書活用)</li> <li>・わたしの辞書作り(辞書活用)</li> <li>・季節の言葉集め</li> <li>・豆腐作り体験→食べ物へんしんブックの作成</li> <li>・自分の考えの根拠となる文章を示す活動の充実(サイドライン、書き抜き等)</li> </ul>
4年	<ul style="list-style-type: none"> <li>・全文シートの活用</li> <li>・語彙の獲得への取り組み(辞書、言葉の宝箱の活用等)</li> <li>・リーフレットづくり、魅力紹介カード</li> <li>・出張スピーチの感想</li> <li>・授業に即した話し合いの場の設定(ペア、グループ)</li> </ul>
5年	<ul style="list-style-type: none"> <li>・キャリア教育に繋がる言語活動の設定</li> <li>・語彙の獲得、活用の実践</li> <li>・ICT活用(スクールタクトでの全体共有、振り返り)</li> <li>・到達度段階に応じた支援の明記</li> <li>・対話活動の目的を明確にした授業の実施</li> </ul>
6年	<ul style="list-style-type: none"> <li>・卒業制作に向けた言語活動の設定(タイムカプセル、お気に入りの教材読み)</li> <li>・自分の言葉を吟味し、相応しい語句で表現する活動の充実(短歌・俳句発表会)</li> <li>・筆者を知るための校外学習の実施(「宮沢賢治」のルーツを探る)</li> <li>・4つの対話活動の実践(「作品との対話」「友達との対話」「教師との対話」「自分自身との対話」)</li> <li>・ICT活用(「power point」意見文やブックトーク、座右の銘のプレゼンテーション)</li> </ul>

【日常活動例】

	活動名	活動時間	内容・期待する効果
低学年	言葉ずもうをしよう	ふれあいタイム ぐんぐんタイム	二人組になり、テーマに沿って二人で交代にその物の名前を言っていき、言葉が出なくなった方が負けとなる。
	言葉のキャッチボールを続けよう	ふれあいタイム ぐんぐんタイム	・二人組で話題に沿って交互に話す。 ・はじめはじゃんけんをして、スタートを決める。 ・3分間、話し合いが止まらないように、質問したり返したりしていく。
	音読	家庭学習	物語や詩などを大きな声ではっきりと読む。毎日継続することで、表現するための声の大きさ、発音、語彙等を上手に覚えることができるようにする。
中学年	ウーバー読書	朝読書中	・現在行っている読み聞かせを拡大し、頻度を上げて行う。 ・様々なジャンルの本と出会う機会を増やすことで、読書活動を盛んにする。
	ヒントでピント	ぐんぐんタイム	3(もしくは5)ヒントクイズを出し、それを答え合うことを通して、言葉で伝え合うことの難しさやそのコツをつかみ、正確な描写をすることを通して、語彙を増やしていく。

	辞書引き リレー	常時	児童が辞書を引き、その解説の中にある興味を持った言葉を引くことを、リレーのようにつなげ、「〇〇とはこういうことです。」という形式で発表する。これらの活動を通して、一つの言葉を多角的な意味で説明できるようにする。
	視写	家庭学習	天声人語や子ども新聞のコラムを視写させる。その上で自分の考えを書く活動を継続することで、思考力や表現力を高められるようにする。
高学年	子ども新聞の記事の要約	ぐんぐんタイム	書き手の最も伝えたいことを読み取って短くまとめる力をつける。
	視写	国語	主体的に文章を読む力、速記力を身に付ける。文章で使われている表現技法を知る。
	出張スピーチの感想	出張スピーチ	プリントを配り、出張スピーチを聞いて自分の感想を書く。他人の意見を聞いて自分の考えをまとめる力をつけさせる。
	チームビルディング活動	ぐんぐんタイム	話し合いを通して、合意をしたり課題解決したりするゲームを行う。

#### ④ 授業実践

学年(実施月)	単元名	教材名
6年(6月)	「視点のちがいに着目して読み、森絵都さんに感想を届けよう。」	「帰りの道」
6年(9月)	「高畑さんの論じ方や表現の工夫を読み解き、アメリカ大使館の方に日本文化を伝えよう。」	『鳥獣戯画』を読む 「日本文化を発信しよう」
1年(10月)	「かくれんぼしているいきものをしらべて、『かくれんぼショーかい』をしよう」	「うみのかくれんぼ」
3年(11月)	「段落の順序に気を付けて読み取ったことを生かして、『食べ物のひみつブック』を作ろう」	「すがたをかえる大豆」 「食べ物のひみつを教えます」
6年(12月)	「自分の考えを未来の自分に届けよう！～タイムカプセルで書き残そう～」	「メディアと人間社会」 「大切な人と深くつながるために」

#### ⑤ 成果と課題

##### ○成果

- ・めあて提示や振り返りの充実により児童が目的意識をもちながら、学習を進めていけるようになってきた。
- ・教師が「身に付けさせたい力」を意識しながら授業デザインを考えるようになった。
- ・音読や日常活動など、1～6年までの継続した指導を行うことができてきた。

##### ○課題

- ・さらなる「適切な言語活動」の実践を進めていく必要がある。
- ・児童が学習意欲を持続するための教師の承認や価値付けをさらに充実させていく必要がある。
- ・考えの形成・共有の学習場面の実践を充実させていく。(ICTの活用、4つの対話)
- ・「表現する」ことを多様化していくことが必要である。

## 5・研究の内容

### (1) 研究主題の捉え

学習指導要領国語科の目標を踏まえ、国語科が目指す資質・能力である「国語で正確に理解し、適切に表現する」ことを目指している。この資質・能力は連続的かつ同時に機能するものであるため、本校の研究主題の考えも「主体的に学び合う」と「豊かに表現する」も同様に考えている。

しかし、「豊かに表現する」ためには、表現する内容となる自分の考えなどを形成するためには、国語科で表現された様々な事物、経験、思い、考え等を理解しようとするための主体的な学び合いが必要であると考え、「主体的に学び合い」、「豊かに表現する」という順にした。

「主体的に学び合い、豊かに表現する児童の育成」を以下のように、解釈し研究を進めている。

#### ① 「主体的に学び合う」児童

国語科では、児童が、学習の中で、対象と言葉、言葉と言葉との関係を言葉の意味、働き、使い方等に着目して捉えたり問い直したりして、言葉の自覚を高めながら、国語科における資質・能力を身に付けていくことを目標としている。そのために、教師が「児童に身に付けさせたい力」を明確にもち、児童自身が「何を学ぶのか」「なぜ学ぶのか」「どのように学ぶ」のかを自覚しながら、学習を進めていくことが重要であると考えた。児童が、自ら見通しをもち既習事項を活用しながら、自分の目標に向けて自分の学びを調整したり粘り強く取り組んだりしていけるだろう。これらの児童の主体的な学習を通して、「国語で正確に理解する」ことを実現させていきたい。

#### ② 「豊かに表現する」児童

「言葉による見方・考え方」をはたらかせながら、表現することを目指す。学習において以下の姿を想定している。

- ア 根拠を明確にして、表現している。
- イ 既習事項を活用しながら表現している。
- ウ 日常活動を生かしながら表現している。
- オ 自分の考えを再構築し、表現している。
- カ 引用等しながら、表現している。
- キ 表現を工夫している。

#### ③ 「適切な言語活動を通じた授業改善を目指して」

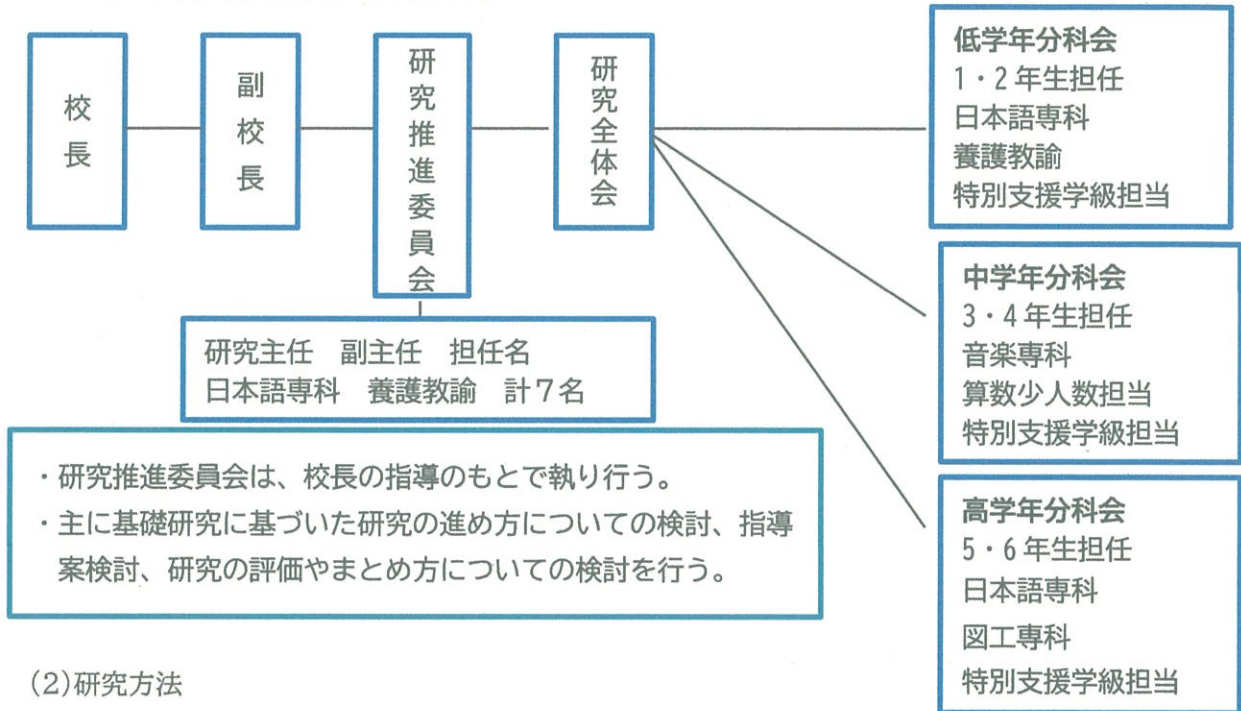
「適切な言語活動」とは、児童の実態に即し、児童自身が「何を学ぶのか」「なぜ学ぶのか」「どのように学ぶ」のかを自覚しながら、学習に取り組むことを目指している。これらを実践するために、以下の授業づくりや授業改善に取り組んでいる。

- ア 国語科年間指導計画や国語科系統指導表に基づいた授業づくり
- イ レディネステストを踏まえ、児童の実態に応じた授業づくり
- ウ 学習指導案の中に「身に付けさせたい力」「何を学ぶのか」「なぜ学ぶのか」「どのように学ぶ」を明記すること
- エ 児童が目的意識をもって取り組む単元課題の設定
- オ 児童の実態や単元のゴールに即した発問や手立ての工夫
- カ 日常活動を生かした単元計画

## 6 研究方法

### (1) 研究組織

研究すること自体が教員の力となって、教育の質を高めることができるよう研究推進委員会を中心とした学校組織で研究に取り組んだ。



### (2) 研究方法

#### ① 基礎研究

- ア 国語科の新学習指導要領を校内で読み合う時間を設ける。また、先行研究の資料を集め、授業実践に生かす。
- イ 講師である輿水かおり先生より新学習指導要領国語科の指導の在り方やカリキュラム・マネジメントの3つの視点についてご講演いただく。
- ウ ICTの活用方法について外部講師を招き、年間3回以上の研修を行った。

#### ② 指導計画、指導内容の明確化

- ア 研究主題「主体的に学び合い、豊かに表現する児童の育成」に迫るために、分科会で目指す児童像や課題、手立てについてまとめた。また、各学年で単元毎の指導事項をまとめ、麻布小学校独自の国語科における系統指導表を作成した。
- イ カリキュラム・マネジメントの視点から、今年度の国語科の年間指導計画を学年ごとに作成した。その際、他教科や学校行事との関連を重視してきた。
- ウ 教材研究会を年に3回行い、指導案作成前に、各分科会から授業デザインの提案をし、協議を行った。

#### ③ 授業実践の実施

- ア 各学年で1回ずつ、計6回研究授業を行った。
- イ 低中高の各分科会で指導案の検討を行ったり教材研究を進めたりし、各分科会で授業提案を行う。また、2学級ある学年は事前授業を行い、支援や手立ての有効性について吟味を行った。
- ウ 分科会から主題に迫る指導過程における提案や作成した指導案を研究全体会や研究推進委員会でも再検討した。

## 6 研究方法

### 社会の要請

予測困難な時代において、児童には、自らの生き抜く力を養い、自らの人生を切り開いていかなければならない。これからの学校にはカリキュラム・マネジメントの視点から、児童の発達段階を考慮し、言語能力、情報活用能力、問題発見・解決能力等の学習の基盤となる資質・能力の育成が求められている。

### 学習指導要領 国語科目標

言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

- (1) 日常生活に必要な国語について、その特質を理解し、適切に使うことができる。
- (2) 日常生活における人との関わりの中で伝え合う力を高め、思考力や想像力を養う。
- (3) 言葉がもつよさを認識するとともに、言語感覚を養い、国語の大切さを自覚し、国語を尊重してその能力の向上を図る態度を養う。

### 本校の教育目標

○元気な子 ○やさしい子 ○考える子

### 児童の実態

- ・自分の思いや考えをもつことが難しい。
- ・発信、受け取りともに「大切な点」を捉えることに課題がある。
- ・自分の考えをまとめることが苦手である。

### 教師の願い

- ・自分の思いや考えをもち学習に取り組んでほしい。
- ・「大切な点」を捉え、自分の考えに生かしてほしい。
- ・自分の考えや思いを整理できるようにしてほしい。

### 【目指す児童像】

低学年	中学年	高学年
言葉に着目し、自分の思いや考えをもち、伝え合おうとする児童	言葉に着目し、自分の思いや考えをまとめ、伝え合う児童	言葉を吟味し、進んで伝え合い、思いや考えをまとめたり広げたりする児童

### 【研究主題】

主体的に学び合い、豊かに表現する児童の育成  
～適切な言語活動を通じた授業改善を目指して～

### 【研究仮説】

カリキュラム・マネジメントの視点から適切な言語活動を設定し、授業改善していくことで、主体的に学び合い、豊かに表現する児童が育つ。

### 【研究内容】(学校の取組)

カリキュラム・マネジメント	授業デザイン	日常的な取り組み
・国語科年間指導計画や国語科系統指導表を生かした授業デザイン	・児童の振り返りの充実 ・校内教材研究会実施	・学校図書館、地域図書館の活用 ・ICT 機器活用 ・日常活動の実践

### 【手立て】(授業改善)

低学年	中学年	高学年
○豊かな表現に導く支援 (話型やモデル文の提示) ○語彙の獲得	○「4つの対話」の設定 ○既習事項の揭示	○児童が目的意識をもてる指導 ○タブレット端末の活用